

---

# 罰あたり者の恋人

神田白兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罰あたり者の恋人

### 【Nコード】

N3826J

### 【作者名】

神田白兔

### 【あらすじ】

幼馴染みの家は神社。そこのご神体を、子供のころ壊してしまった梓は、罰があたったのか、筋金入りの不幸体質で、幼馴染みの司にフォローされて過ごしているが……。幼くて、拙くて、だからこそ精いっぱい心をこめて紡ぐ、二人の純愛。

## 0・恋の終わり

『とても仲のいい、二人の幼馴染みがありました。』

一人はとても頭がよくて、正義感の強い子でしたが、もう一人はどうしようもなくわがままで、自分勝手な子供でした。

強くなろうとせず、困ったことがあればすぐに泣いて、誰かに助けられるのが当り前で、誰かに頼るのが当然と思っているような子供は、もう一人の子供にいつも甘えて、頼って、すがっていました。大好きな人を守ってもらってばかりな弱い自分を、何とも思っていないでした。

幸いなことに、もう一人はそんな甘ったれでわがままだというのに、その幼馴染みが大好きでした。

「大きくなったら、結婚しよう」という約束をするほどに。

だから、その言葉に甘え続けていました。

ある日、その甘ったれに罰があたり、大切なものを失い、不幸になりました。

そうして、二人の幼馴染みに4年の月日が流れました』

## 1・不幸体質の日常

「ばぎやああーっ!!」

緊張感が一切ない悲鳴？ が、食堂で上がった。悲鳴と言うか、奇声か雄叫びだな。これが悲鳴だとしたら、ホラーもサスペンスも怖くなる。

「梓、どうした？」

正直言っで全力で他人のふりをしときたい声だったが、そういうわけにもいかず、俺は奇声の発生源に尋ねた。

「……司<sup>つかさ</sup>あ……」

奇声の主、俺の幼馴染みの神薙梓<sup>かみなぎあずさ</sup>は、食堂の手洗い場の前で今にも泣きそうな顔になって、昼飯のカップ焼きそばを抱えていた。

「湯切りを失敗したのか？」

尋ねながら、手洗い場を覗き込んで見てみたが、中身は流しにぶちまけられていない。

「？ どうしたんだよ？ 何があっただ？」

悲鳴の原因がさっぱり分からず、再度俺が尋ね返すと、梓は涙目で呟いた。

「……ソースが」

「ソース？ ……まさか、カップ麺の要領で、湯と一緒に入れたのか？」

梓はプルプルと首を横に振って、俺の第二予想を否定する。

「……こいつ、今日はいつたい何をやらかしたんだ？」

「ソースが……」

もう一度呟きながら、梓は、カップ焼きそばのかやくを取り出す。  
「……初めから入ってなかった」

よく見ると、梓はかやくを二つ持っていた。

しばらく俺は、ゆであがったカップ焼きそばと、二つのかやくを持って途方に暮れる梓をぼんやりと見つめ…、さすがに我慢できなくなつて、膝から崩れ落ちて盛大に笑った。

「笑うなああっー!!」

「何なんだよ！ 二つともかやくつて!! 二つともソースなら、たいした問題じゃなかったよ！ いっそ両方入ってなかったら、お湯を入れる前に気がついたのに!! 両方かやくつて、何なのさ! ? 私が腹ぺこで待った三分間を返せー!!」

どうもこいつは、焼きそばの中の袋をよく見ずに二つとも取り出し、湯切りしてソースをかけようという段階で、両方ともかやくという痛恨のミスに気がついたらしい。

……ミスって言い方は、かわいそうか。今回はお前、何も悪くないし、注意して防げるもんでもないしな。

だからこそ、久々にツボった。笑いが止まらねえし、横隔膜痛てえ……

「あー、もう！ 司、笑いすぎ！ ガンマ笑いすぎ!!」

梓は相変わらず意味がまったくわからん新語を作り出しながら、食堂の長テーブルをバンバン叩いて怒る。

「……悪……い。けど、今回のマジ……ツボに……」

あ、だめだ。目の前のかやくだけがやたらと多くかかったカップ焼きそばを見ると、ぶり返してきた。

「もーいいっ！ 司なんて知らん！ 司の横隔膜なんて、引き千切れてしまえばいい!!」

地味に怖いセリフを吐いて、梓は完全ヤケクソで焼きそばをすすり出した。

「つて、おい！ それ食うのかよ！ 味なくて、まずいだろ？ おごるから、違うもん食えよ」

機嫌を直させるのも兼ねて、俺が提案するが、梓は麺をすすりながら言う。

「いい。食べ物は無駄にしちゃいけないもん」

まずそーに眉間にしわ寄せて、梓は味なし焼きそばを黙々食べる。……意地を張ってるんじゃないかって、本当にそう思っていることは知っている。体調不良以外で食べ物を残したら負けと、こいつは昔からいつも言っているから。

「いつも思うんだが、お前は誰と戦ってるんだ？」

苦笑しながら、俺は弁当からソーセージを一つ箸でつまんで、梓の目の前に持って行った。

「ほら、口直しだ。がんばれ、あと半分」

一瞬前まで、すねて膨れっ面だったのが、満面の笑顔になって、梓は口を大きく開けた。

お前は鳥の雛か？　そして俺は親鳥か？　と思いながら、俺はその口にソーセージを放り込んだ。

「さくらの桜野クンと梓って、付き合ってるの？」

近くの席でパンを齧っていた、同じクラスで、梓の友達の女子がそんなことを訊いてきた。

「ないない。私ら、ただの幼馴染みだよ」

梓は慣れた調子で否定した。中学に上がった頃から、訊かれ始めてきたが、二年に上がってからさらに訊かれるようになり、もう互いに照れるなんて可愛らしい反応はない。

あまりにもあっさりとした否定だったからか、質問してきた奴は、調子が狂ったような苦笑いをしながらも、一緒に食べている女子たちとさらに訊いてくる。

「えー？　でも二人って、いつも一緒に学校来たり帰ったりしてるよね？」

「それにどっちも名前呼びだし、……ただの幼馴染みにしては仲良すぎない？」

これも耳タコになるまで、言われてきたな。まあ、確かに男女の幼馴染みが小学生までならともかく、思春期真っ盛りな中学生になっても仲がいいのは、我ながら珍しいと思うけど。

「私らの家、お互いに五分で行ける距離だもん。嫌でも、たいてい一緒になるよ。」

「呼び方だって、今更変えるのも何か違和感あるからってだけだしな」

何度も言ってきたことを交互に言うが、まだ何故か納得できないようだ。一人が、パツクジューズをすすりながら、ぼそりと言った。「じゃあ、桜野くんが梓の不幸の世話すんのも、幼馴染みだから？」弁当食ってた手が、その言葉で止まる。

自分の顔が強張るのを感じながら、俺は答えた。

「それは、……あまり関係ない。……俺の責任だから……」

俺の「責任」と言う言葉に、好奇心が刺激されたらしく、質問してた全員が、椅子を動かして身を乗り出して、……無責任に目を輝かせた。

「え？ 何々？ 何の話？」

「責任ってどういう意味？ 何があつたの？」

「司のせいで、私、天罰が当たっちゃったの」

質問に答えたのは、かやくだけを振りかけた焼きそばを完食した梓。

「天罰？」

誰かのオウム返しに、梓はペットボトルの茶を飲み干してから、頷いた。

「そー、天罰。司の家って神社でさ、四年くらい前に、神社の……社っていつのかな？」

まー、ともかく中に入り込んで遊んでて、私がその御神体の鏡をね、何気なく手の取った時、いきなり司がふざけて私の髪を引っ張ったの。それで私は驚いて、思わず鏡を落として割っちゃったんだよ。あー、思い出したら腹立ってきた！！ 司のテラマックス禿げー！！」

「禿げてねえよ。理不尽な罵りをすんな」

「っーか、どうでもいいが、すげー眩しそうな禿げだな。」

俺のつつこみも、周りから向けられる奇異の視線もモノともせず、梓はまた机をバンバン叩きながら叫ぶ。

「その日の夜に高熱出してから、私はずっと不幸！ テスト範囲は毎回のごとく間違えるし、たまには外で弁当食べようと思ったら、カラスに襲われる！ 買ったばかりのシャーペンの替え芯が、何故か全部中途半端な長さで折れてたこともあった！！」

周りのクラスメイトだけではなく、全然関係ない奴らも嘔き出したのが聞こえた。

……ああ、そついやあつたな。そんな事。しかもそれ、テストの直前に買ったやつだったんだよな。

さらに梓はヒートアップして、自分の不幸体質を焼きそばすつていた時以上にやけくそでアピールしだす。

「最悪なのが、昨日！！ 学校来たら、下駄箱にラブレターが十通くらい入ってた！！」

「……それは、むしろラッキーじゃないの？」

きょとんと、もっともなことを梓は友達に言われたが、ジト目になつて事の真相を語る。

「全部、私宛じゃなかった。全部間違い。しかも、どうやって間違えたのか、あて名は全員違う！ 上下左右の下駄箱の子と間違えられたとかじゃなくって、クラスどころか学年違う奴も多数！！ ねえ、これは私が不幸なの！？ それとも、出した奴が不幸なの！？ そしてそのラブレターは、返しておくべきだったの？ 律義に、宛名の下駄箱探して返してたら、ホームルーム遅刻したし！！」  
ハイテンションで自分の不幸を語りまくる梓だが、はつきり言つて誰一人として同情していない。むしろ爆笑の嵐を起こしてる。……見方を変えたら、こいつは不幸なんじゃなくって、笑いの神に愛されてるんじゃないのだろうか？

「あー、やばっ、おなか痛い！ おかしすぎる！ あんたいつもドジだなーって思ってたけど、確かにそれはドジと言うより不幸体質だわ」



「直美！ 泣くほど笑うな！ どいつもこいつも他人事だと思って、爆笑しやがって！！」

またすねて膨れ始めた梓の機嫌直しに、今度はアスパラのベーコン巻きを口に放り込む。

「まあ、傍から聞くと楽しいが、毎日似たようなことがおこつてりや、うんざりしてくるよな」

「そーだよ！ 確かにさ、重くて暗くて洒落にならないような不幸じゃないけど、毎日起こつてたらもう、ストレスたまりっぱなしだよ！」

フォローのつもりで言ったセリフが逆効果を起こし、アスパラを食いながら梓はキレた。

「うわーん！ 司が原因なのに、何で私が天罰受けなきゃなんないの！！ 司のせいだー！ 司のメタメタ馬鹿あー！

動物にやたらと嫌われるのも、プールから上がろうとして、飛び込み台の取っ手の部分掴んだら、その取っ手が取れたのも、公園から飛んできたボールを珍しく避けたら、今度はプラスチックのバットが飛んできてそれにあたったのも、失恋した姉ちゃんに八つ当たりされるのも、弟にバカ呼ばわりされるのも、母さんが通販で要らん買い物するのも、父さんの足が臭いのも、全部司のせいだー！！」  
『後半は不幸関係ない』

俺だけじゃなく、周りの奴らがほとんど全員ハモって突っ込んだ。

## 2・友達以上恋人未満〃保護者？

放課後、トイレ掃除当番の梓を教室で待っていたら、今度は俺の友達が訊いてきた。

「なあ、司」

「ん？ 大樹<sup>たいき</sup>か。何だよ」

「お前つて、帰宅部だよな？ …… 何で毎日そんなに荷物が多いんだ？」

うちの中学の指定鞆はリュックとボストンの二種類で、テスト期間や短縮授業などで、午後の授業がない場合以外は、リュックだけで学校に来るのは禁止。

今日のうちのクラスは、体育もないし、クソ重い資料集やら辞書を使う授業もないので、たいていの奴はボストンもしくは、校則違反でリュックしか持って来てない。

その中で、帰宅部だつていうのに、ボストン・リュック両方ともパンパンな俺は確かに目立つし、気になるだろうな。

「ああ、嫁の為だよ。神薙の為だよなー、司ちゃん」

梓には負けるが、小学校からの腐れ縁（ちなみに、俺にとってこいつは友達じゃない）が説明した。つーか、梓は嫁じゃねえよ。

「神薙の為？ あ、の、歩く衝撃爆笑映像の為に、この大荷物？ 上げえな、司」

……梓、お前はお前の知らない所で、この上なくぴったりなあだ名が付けられてるぞ。

「なーな、その中、何入れてるんだよ？ 前から少し、気になってたんだ。見せてくれよ」

大樹は言いながら、俺のボストンを持ち上げて、中を開けようとした。

「！？ やめろっ！！」

ひったくるように俺はボストンバックを奪い返し、俺の剣幕と勢いに押され、大樹は尻もちをついて、倒れてしまった。

「あ…、悪い。けど、鞆の中を勝手に見るのはやめてくれ。見たいのなら、見せるから」

謝って、倒れた大樹に手を貸すと、大樹も反省してくれたらしく、  
「いや、俺が悪かった。マジでごめん」と謝ってくれた。

「……お前って本当に嫁のことになると、性格変わるよな」

「今林、嫁じゃねえって、何度言ったらわかるんだよ」

呆れて、バカにするように言われたのが気に障り、俺が睨みつけながら言い返すと、今林の奴はにやにやしなから、昔話を掘り返した。

「えー？ お前ら、『大人になったら、結婚する』って、いつも言ってたじゃん。小学校の頃から筋金入りの馬鹿ツプルが、今更照れるなよ

あ、そっかー。神薙は嫁じゃなくって、旦那って意味か。可愛い可愛い司ちゃんの方が、フリフリなエプロン似合いそーだしな」

わるかったな、フリルが似合いそうな女顔で。家の神社でも、年末年始や祭りの時、女手足りねーからって、巫女の格好してんのがそんなに面白いなら、一生言ってる！

あと、「結婚する」とか言ってたのは、小学校の頃からじゃなくって、小学生の頃はだ。そんな約束、梓は覚えてない。

もう、とつくの昔になくなった約束を、俺をからかう為に口に出すんじゃねえ！！

「……えーと、司あー。さっき持ってみた時、かなりボストン重かったけど、この中マジで何入れてんだよ」

喧嘩になりそうな空気の中に、大樹がおどけて割って入る。

大樹の目の前で喧嘩するのも気分が悪いし、何より喧嘩の最中に梓が掃除を終えて帰ってきたら、かなり面倒なことが起こるので、ここは大樹に感謝して、俺は今林を無視して鞆を開けた。

まず最初に出て来たのは、うちの学校のジャージ。それから、タオルが二枚ほど。ハンカチ代わりのハンドタオルじゃなくって、汗などを拭くフェイスタオル。…本当は、バスタオルを持ち歩きたいところなんだけどな。

「……もう一度確認するけど、司って帰宅部だよな？」

帰宅部です。間違いなく。

「あいつよく、水を頭からかぶったり、ワックスかけたばかりの所で滑って転んで、ワックスまみれになったりして、制服汚したりするんだよ。ついでにほら、濡れたり、汚れて洗った服や髪を乾かす用に、ドライヤー」

屋外でも使えるように、コンセントではなく電池式。

「……歩く衝撃爆笑映像の名を舐めてたわ、俺。これを常備させるほどだよ。」

これだけで驚いてたら、まだまだ甘い。梓は、ジャージに着替えてすぐにまた汚す羽目になるのも珍しくないぞ。

「あと、靴。靴もよくなくすんだよ。犬に追いかけて逃げた時とかに」

『昔のマンガかつ!!』

大樹だけじゃなく、今林も突っ込んだ。つーか何でまだいるんだよ。お前は部活だろ？ 早く行けっつーの。

「それから、カロリーメイト」

「ああ……、そういや先週の四限目の移動教室で、次は昼休みだからって弁当を机の上に置いてたら、体育のクラスのホームランボールが窓割って入ってきて、神薙の弁当に直撃して、えらいことになってたな。」

大樹は遠い目をして言った。

ちなみに梓は、「ちくしょう！ 三秒過ぎてやがる!!」と言って、腹を鳴らしてた。

いや、お前はこの状況で、三秒ルールを適用させる気か？ ガラスまみれで、床にばらまかれて落ちたのは、どうでもいいのか？

と、小一時間問い詰めたかった。

「あとは、裁縫セットと、よく怪我もするから、救急箱」

「あー、それは絶対いるな。……って、でかつ！ 裁縫セットは普通に持ち運び用だけど、救急箱って本当に救急箱かよー！」

どうも、包帯と絆創膏、あとは小さなオキシドールくらいがセットの、遠足や旅行にでもあれば便利なサイズを想像してたようだが、俺が出したのはマジ本物の救急箱。包帯や絆創膏は各種大きさを取りそろえて三箱くらい入れて、火傷の薬、かゆみ止め、虫よけ、胃腸薬、下痢止め、風邪薬に解熱剤などもしっかり入ってる。さらに、いざと言う時の為に、梓の保険証のコピーも入れてある。

「ま、こんなもんか」

だいたい見せるもんは見せて、全部しまい直す。

「……司、お前すごいよ。神薙がお前の嫁って言われても、仕方がないよ。って言うか、嫁相手でも、ここまで用意できねえよ」

大樹は本気で感心したような溜息をついて言う。今林と違って、からかったり、厭味のニュアンスが全くないから、こいつの言葉は素直に受け取れる。

「褒め言葉として、受け取っておくよ」

「何、かつこつけてんだよ、お前。やっぱりお前、神薙のことが好きってことだろ？ いい加減、認めるよ」

今林がまた、うっとおしいことを言うのにムカついて、振り返って睨みつけるが、その奥の廊下をびしゃびしゃと歩く人物に、俺の意識は全部持ってかれた。

「梓――！」

「……あー、司あー。まーたやっちゃったよ」

全身濡れ鼠になって、ごまかすように笑ってる梓に駆け寄って、ポストンを漁って、とりあえずタオルを頭にかけてやる。

「どうした？ 何があった？」

「ホースの中に何かが詰まっていたらしくて、水が出ないなーと思って、蛇口思いつきり捻ったら、……ホース外れて私に思いつきりか



引っ掛かるぞ!!」

どんな顔だ？

梓は今林にびしっ！と指さし、さらに俺らを笑わせたいとしか思えない罵倒を続けた。

「便器に頭突っ込め？ 便器の中身みたいな顔してるお前が、中に入って流される！それが嫌なら、さつさとまったく似合わないサッカー部に行つて、『俺の顔面がゴールネットです』って言って、ボールを全部顔面に受けて、整形して来い!!」

だからどんな顔だよ!!……ダメだ。笑いが止まらなくて、突っ込めねえ。もう、周りの奴らみんな、腹抱えて、声すら出ないくらいに笑ってんじゃねえか。

俺と腐れ縁ということは、自動的に梓とも腐れ縁である今林。こいつとの口喧嘩では、何か色んな意味で勝てないことはよく知ってるから、顔を真っ赤にしながら慌てて教室から出て行つた。

「まったく。言い返せないなら言わなきゃいいのに。小学校から、本当にあいつ変わんなくて、嫌になる」

「……お前の返しは、さらにキレがよくなりすぎなんだよ」

やっと話せるくらいに呼吸が整つたので、口を出す。あそこまでマシンガントークで言われて、誰がどう返せと？

「そう？ 姉弟いたら、これくらいの口喧嘩、日常茶飯事だよ？」

お前のうちの口喧嘩は、相手を笑い死にさせるのが目的なのか？

「あとさー、サンキュー、司。怒ってくれて」

さらりと、ついでのように軽く自然に、梓は笑って言った。

ただ怒っただけの俺、何もできなかった、できたとしても、余計に面倒にさせるだけの俺に、彼女は礼を言った。

「……なあ、やっぱお前ら、付き合ってたんだろ？」

大樹がものすごい呆れた声を出して訊く。

「断じて、違う!!」

さすがにこの状況は照れ臭く、やけくそで叫ぶ。

「梓！ さつさと着がえろ！ バカは風邪ひかないとは言っても、

濡れ鼠になった事情がバカだから、引くかもしれないし」

「何だそれ！？ メタボリック失礼だな！！」

「お前はメタボの意味わかって言ってるのか！？ いいから、ほら！」

俺はジャージと大樹には見せなかった黒いビニール袋を渡して、梓の腕をつかんで引く張って、着替えができる場所を探しに出ていく。

正直に言うと、教室から逃げただけだったりするけど。

これ以上教室にいてられるか！

梓の親に頼まれてるからって、こういうびしょ濡れになった時の為に、下着まで持ち歩いてるなんて知られたら、俺はたぶん死ぬぞ！！



### 3・君がわからない

「ねー、司」

「何だ？」

「なんで司はさ、いつも私に付き合ってくれんの？」

いつもの帰り道の河川敷で、いつもの雑談のように、梓は訊いた。何気ない、ふと気になったから尋ねただけの質問のはずだ。

……けれど俺には、「邪魔だ」と言われたような気がした。存在を否定された気がした。

「理由がなくちゃ、いけないものなのか？」

尋ね返した声が、怒っているような声でむしろ安心した。

気を抜けば、泣いてしまいそうなくらい、その問いかけは俺を突き刺したから。

「理由がなくちゃいけないとかじゃなくて、理由がなくちゃおかしいじゃん。こんな、面倒ばっかりかける奴の世話を、毎度毎度焼くなんて」

梓は、呆れたように言う。

俺に、言い聞かせるように言う。

「別に、司が責任を感じなくてもいいんだよ。天罰天罰って言うけど、そんなのその場のノリで言ってるだけで、私は全然、そういうの信じてないし。仮に本当にそうだととしても、洒落にならないようなことは起こったことないんだし。」

……司が、面倒だって思うんなら、いつでも勝手に見捨ててよ。私は図太く、生きていけるからさ」

そう言って、笑った。

運動部でもないのにジャージ姿で、腕や足にはいつも生傷が絶えずなくて、カップ焼きそば一つ食うのにも、奇跡的な不幸を生みだしというこいつは、笑顔で俺に、「自分を見捨てろ」と言った。

「……馬鹿か、お前は。いや、もうお前は馬鹿かじゃなくって、馬鹿だ。正真正銘の大馬鹿だ！」

「なっ！？ ひ、人が気を使って言ったのに、馬鹿と断定！？ 馬鹿なのは司の方でしょ！ この超絶お人好し世話焼き才色兼備！！」  
「罵倒か褒めるかどっちかにしろ！」

それに、超絶お人好しはお前の方だろう。

……どうして、そういうことが言えるんだ？

俺の過保護がうつとおしいからじゃなくて、なんで俺が責任感じてることに、お前が気にかけるんだよ？

おかしいだろ？ お前は、他人を心配できる余裕なんて、いつもどこにもないっていうのに。

「梓、逆に聞くが、もしお前と俺の立場が逆なら、お前は俺を見捨てるのか？ できないだろ？ お前は絶対に、そんなことしないし出来ない！！」

お前に出来ないことを、俺にやらせようとするな！ 天罰も、責任も関係ない！ お前の世話を焼くのは、俺の意志だ！

いまさら見捨てるなんて、後味悪いことやらせるな！！」

……なんで、泣きそうな顔になってるんだよ？

どうしてお前は、俺から離れていくことを望むんだ！？

責任を感じなくていい？ ふざけるな！！

これだけは、俺のものだ！

この「責任」だけは、お前の世話を焼く大義名分だけは、俺だけのものにさせてくれ。

……俺は、これに縋ってしか、生きていられないんだよ。

「司の馬鹿！」

「はあ？」

唇を噛みしめて、俯いたまま梓は叫んだ。

「司の馬鹿！ 司には……司にはわかんないよ！」

いまさら見捨てるのが、後味悪いんなら、どうして最初から見捨てなかったの！？ 司の……司の……司の……司のスーパーデラックスギヤ

ラクシービックバンオメガ朴念仁ー!!」

頭が素晴らしく悪いとしか言えない罵倒を残して、梓は走り去るが、十メートルも走らないうちに、風で転がってきたスーパールのビニール袋に足を絡まらせてこけた。

「梓！」

俺はすぐに駆け寄るが、俺がたどり着くよりも早く、梓はさつさと立ち上がる。

そして、俺を見据えていった。

「……私は、一人で立てるよ」

「……梓？」

お前は何か言いたいんだよ？

わからない。わからないよ、梓。

お前は、俺に何を知ってほしいのか、俺には全然わからないよ。

教えてくれよ、梓。

俺は何を知れば、お前のそばにいられるんだ？

「私は、司がいちいち面倒見なくても、平気だもん。司が、ずっとそばにいらなくても、大丈夫だよ。」

……だからさ、司」

彼女は、泣き出しそうな顔で、優しく微笑んだ。

「私を、見捨てなよ」

懇願とも、命令ともとれる言葉を残して、梓は走って行った。

今度は、こけなかった。

「梓？」

その背が見えなくなるまで、その場に立ち尽くした。

何も、本当に何もわからない。

どうして、あいつがいきなりこんなことを言い出したのかも、あいつが何を望んでいるのかも、どうしてあいつは、自分が一番辛そうだっていうのに、笑って俺に「見捨てろ」なんて言ったのかわからない。

わかるのは、たった一つ。

梓には俺が必要不可欠だと思っていたのは、ただの自惚れだったということだけ。

俺は、四年ぶりに泣いた。

次の日の昼休み、大樹に訊かれた。

「司、お前さ、神薙とケンカした？」

この質問は、本日七人目。……そんなに俺らはわかりやすいのか？  
って、聞くまでもなくわかりやすいか。今、梓とではなく大樹と  
昼飯食ってるのが、いい証拠だ。

「……ケンカ……なのかなあ？」

弁当を半分以上残して、箸を置き、呟いた。

ケンカなら日常茶飯事だ。けど、昨日のはいつたい、なんて言え  
ばいいんだろうな？

一方的に、梓に俺のしてきたことを否定された。

でも、梓自身がひどく傷ついていた。

言いたくないことを言って、自分で自分を傷つけて、それでも、  
あいつは笑った。

あいつが、何をしたかったのかはわからない。

何度ももう一度話し合おうと、俺は何をわかっていないのかを尋  
ねようとしたけど、梓は俺の相手をしようとしなかった。

いつもより早く家を出て、どんな不幸で傷ついても、自分でフォ  
ローしていた。

……俺なんて、いらないうように……

「……俺、梓に嫌われてんのかな？」

「ありえねえよ」

俺の心の底からの不安を、大樹はパン食いながら、即答で否定し  
た。

「えーとな、司。俺はさ、お前とも神薙ともまだ一カ月くらいの付  
き合いだけど、それだけは自信持って否定できるぞ。」

神薙はお前のこと嫌いなんて、絶対にあり得ねえよ」

……どうして、そう言い切れる？

俺にはわからないと言われたのに、最初から見捨ててほしいって言われたのに、それなのに梓が俺を嫌ってないなんて、どうして大樹が言い切れるんだ！？

俺はずっとずっと、梓と一緒にいたのに！！

「まー、確かに今日の神薙は、司に全然頼ってないけどさ、……でも、よくよく思い返せば、神薙って自分からお前に頼ったり、助け求めたりしたことないじゃん？」

なんつーか、今日だってお前を避けてるって言うより、……頑張ってる自分を見てほしがてるように見えて、微笑ましいぞ」

目から鱗が落ちるとは、まさしく今の状況のことを言うんだろう。

そうだ。梓はよっぽどのことじゃない限り、俺に「助けて」なんて言わない。俺に、頼ったりなんかしない。

いつだってあいつは、自分の力で頑張ってきた。

全部が中途半端な長さで折れたシャー芯で、何度も補充しながらテストを受けていた。

自分に関係のないラブレターを、わざわざ全部返しに行った。

おごるって言ったのも断って、まずいカップ焼きそばを完食した。

ああ、本当に俺があいつには必要だなんて、自惚れにもほどがあった。

梓が強いつてことくらい、昔っから知っていたはずなのに。

「……俺はいつも、余計なお世話ばっか焼いてたってことか」

「いやいやいや！　なんでそんなネガティブな方向に落ち着くんだ！　俺が言いたいのは、そういうことじゃねえ！！」

先走って鬱になった俺を、大樹が止める。

「司、俺が言いたいのは神薙はお前に認めてほしいんじゃないかってこと」

「認める？」

「そうだ。ほら、神薙って、不幸体質なだけであって、ドジでも運

痴でも頭が悪いわけでもねーじゃん。むしろ、不幸さえなければあいつ、めちゃくちゃパーフェクトな人間だって、司、お前が言ってただろう？」

そうだ。梓は四年前まで、不幸になる前までは、勉強もスポーツもできて、破天荒すぎる性格だから、大人受けは良くなかったが、その底抜けの明るさがクラスの中心だった。

そして、いまでもあいつは俺より成績はいいし、運動神経もいい。ただ、それを上回るほど不幸なんだ。

「俺らは神薙イコール不幸ってのが定着してるけど、お前は違うじゃん？ 神薙が不幸な奴っただけじゃなくってこと、知ってるんだろ？」

だからこそお前に、認めてほしいんじゃないの？ 不幸なのを、かわいそうかわいそうって言って、フォローされるんじゃないかって、不幸でも、頑張って一人で成し遂げたことを見てもらって、褒められて、……助けてもらえばかりじゃない、対等な立場になりたいんじゃないの？」

……さっきのが「目から鱗が落ちる」なら、今はなんて表現すべきだろう？

目に長年こびりついていた錆が、洗い落とされるとでもいうべきか。

そうだ。

俺は、梓が頑張ってるのに、梓の頑張った成果を見なかった。梓が頑張ろうとしているのを、横からしゃしゃり出て、あいつをかわいそうな子扱いして、何もさせなかった。

俺は、俺の自己満足のために、あいつのすべてを貶めた！

梓が、俺にはわからないというわけだ。

自分にとって都合のいいものしか、俺は見えていなかった。

「……おい。またお前、ネガティブスパイラルにはまってないか？」

「はまるも何も、ネガティブになるしかねーよ。……本当に、何も

わかっていない自分が嫌になる」

俺の返答に、大樹は仕方ないと言いつつ苦笑をする。

「ああ、本当にお前は何にもわかってねーよ。」

お前のことが嫌いなら、昨日、全身ずぶ濡れのまま、お前をかばったりなんかしねーだろーよ。」

…………… そうだな。

まったくもって、その通りだよ。

#### 4・本当の被害者

謝ろう。

正直言つて、何を謝ればいいのかはわからないが、とにかく土下座でも何でもして、謝り倒す！

そこまですたら、さすがに梓も相手にせざるおえないだろう。

そして、訊こう。

お前が何故、あんなにも辛そうに笑つて、「見捨てろ」なんて言つたのかを。

一体梓は俺に、何を理解してほしかったのかを。

教えてくれ、梓。

俺は、お前と一緒にいたいんだ！

そう決心して、放課後俺は、梓がトイレ掃除から帰ってくるのを教室で待っていた。

梓がいくらなんでも無視しようがないように、窓際の一番前の席、梓の席で。

「よー、司。今日も嫁を待ってるのか？ ケンカ中でもあつたかなー」

今林がまた茶々を入れてくるが、無視だ、無視。

「ほんと、お前は昔から神薙大好きすぎるよなー」

無視しようにも、どうしたってこいつの言葉は、俺を苛立たせる。落ち着け。無視しろ。外でも眺めてろ。

俺は少しでも今林から意識を外すために、窓に目をやる。

『司』

「！？」

意図しない方法で、それは成功した。

今林は長々と嫌みやからかいでも言ってるんだろうが、そんなもん俺の意識からは、綺麗さっぱり排除された。

窓ガラスに映った俺の顔を見た瞬間、そして窓ガラスの「俺」が、



話しかけてきた時から。

窓ガラスに映る俺は、確かに俺の顔だが、今の俺がしているわけのない表情をしていた。

瞳は全てを見飽きたように冷めているくせに、唇には嘲るような冷笑を浮かべ、「それ」は言う。

『この不幸は、私の管轄外だ。』彼女』の元へ行つてやつたらどうだ？』

頭が、真つ白になった。

気が付いたら俺は、今林を突き飛ばして走つていた。

梓が掃除をしているはずの、西校舎1階の女子トイレまで。

「桜野クン、かわいそう。梓の世話ばかりで」

「そーそー。かつこいいし、性格もいいのに、梓の世話ばかりで彼女も作れないなんて」

「梓も、あんまり甘えすぎない方がいいよ。そのうちぜーったい、愛想尽かされちゃうから」

下品な笑い声が、輪唱した。

……………何なんだ、これは？

女子トイレの中で、女三人が掃除用具片手に梓を囲んで、そんな事を話してた。

俺が、かわいそう？ 梓のせいで、彼女ができない？ いつか絶対、愛想を尽かす？

こいつらは、一体何を勝手に言ってるんだ？

梓……………、どうして何も言わないんだ！？

いつもの、マシンガントークはどうした？ どうして、デッキブラシを握りしめて、黙って俯いてるんだよ！！

「ねー、梓。悪いんだけど、便器洗うの一人でやってよ」

「そうだねー。梓と一緒にやるの怖いもん」

「便器の水が、逆流してきたりしてー！」

……………違う。そんなことは起きない！

梓の不幸は、「他人」を巻き込まない！ 梓の不幸は梓に対しての「罰」だから、他人を巻き込むような大きな不幸は起きない！むしろ、他人がそばにいれば、梓自身の不幸も防げるのに！

「……うん」

どうして、どうして文句も言わずに頷くんだ！

どうして……どうしてなんだ、梓？

その三人は、お前の「友達」じゃなかったのか？

どうして、お前の「友達」が、お前をボロボロに傷つけて笑っているんだ！！

「あずさあつ！！」

「！？ 司！？」

耐えられなかった。我慢できなかった。

俺は喉が裂けそうなぐらいに叫んで、中に入った。

「え？ ちよっ！ 桜野クン！！ ここ女子トイレ！」

「あ、梓に用なら、ちよっと待ってよ！」

女子トイレだろうと、どこだろうとどうでもいい。

俺は、梓を囲っている奴らを突き飛ばし、梓の腕を掴む。

「きゃあ！」

「冷たい！ ひ、ひどいよ、桜野クン！」

「……ひどい？」

自分でもぞつとするほど、冷たい声が出た。

「これくらいがひどいのなら、お前らが梓にしていたことは何だ？」

俺が、自分たちの会話を聞いてたと気づき、三人は顔を引きつらせた。

俺の腕の中の梓も、ひどくショックを受けたような顔をする。

……どうして？ どうしてお前が、そんな顔をする？

お前は被害者なのに！ どうしようもなく、傷つけられたっていうのに！

「あ、あのね、桜野クン。さっきのは冗談だから！」

「そうだよ！ 本当に梓一人で掃除なんてさせないよ！」

媚びる言葉がうつとおしい。冗談？ 冗談だったら何を言ってもいいと思ってるのか？

頭にのぼった血が沸騰する。

殺してやりたい。

梓を傷つけたこいつらを！ その材料になった、俺自身も！！

「……司！」

梓が、俺の腕の中で叫んでくれなかったら、俺は、間違いなくこいつら三人を殴りつけていた。

「……やめて。司、やめて。

いいの。気にしてないから。私は何も気にしてない！ 直美や果歩達の言つとおりだから！

……だから、やめて。……私の友達を、怒らないで」

友達？

お前は、こんな奴らを友達というのか？

お前の不幸をだしに、掃除を押し付けて、嘲ったこいつらを！！  
「……こいつらの、言う通りなんかじゃない」

掌に爪が刺さるほど拳を握り締めて、怒りを抑えつけて、せめてこれだけは訂正する。

「俺は、かわいそうなんかじゃない」

これだけは、訂正しなくちゃいけない。

「俺は、お前の世話を好きで焼いてるんだ。全然、かわいそうなんかじゃない」

『そうだな。』

かわいそうなのは、司、お前じゃない』

トイレ内に取り付けてある鏡が、そこに映る俺ではない俺が語る。  
『かわいそうなのは、お前のせいで『罰』を受ける羽目となった、

神薙梓だ』



## 5・罰あたり者

「ごめんなさい」

「ごめんなさい。ごめんなさい」

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

暗闇の中、ひたすら謝った。

割れた鏡をパズルのようにつなぎ合わせながら、鏡の切っ先で手は血まみれになりながら。

俺は、俺のせいで梓が割ったしまった御神体の鏡を、ひたすら謝りながら、もう戻らないものを直そうと、必死になっていた。

梓が、急な高熱を出して、入院してからずっと、一晩中。

「ごめんなさい。俺が悪いんです。入っちゃいけないって言われてたのに、俺が入って遊ぼうって言ったんです。俺が、ふざけて梓の髪を引っ張ったから、梓が落としちゃったんです。梓は、ちゃんと正直に謝ろうとしたのに、俺が黙ってようって言ったんです。

梓は何も悪くないんです。悪いのは、全部俺です。俺の方なんです」

原因不明の高熱。何をしても、治まらない症状。真っ蒼な顔色。

天罰だとしか、思えなかった。

だから俺は、ひたすらに謝った。

「天罰は俺に落してください。何でもします。お願いします。許してください。梓を許してください。ごめんなさい。ごめんなさい…

…」

病室で、家族とたくさんの医者や看護師に囲まれて、息も絶え絶えに梓は言った。

『司……、私……死んじゃうのかな？』

強い彼女が、そう言って泣いた。

いつもいつも、女みたいな顔で、祭りのとき女手が足りないから

つて、巫女の格好でお神楽させられて、今林にからかわれて苛められていた俺を、守って、かばってくれていた強い梓が泣いた。

「……お願い……します。……梓を……助けて……。」

梓を、殺さないで」

『ならば、お前に二つの覚悟を問おう』

「!？」

誰もいないはずの堂に、声が響いた。

その声は、まぎれもなく俺の声だった……。

「だ、誰!? どこ!？」

『ここだよ、司』

その声は、俺の血で汚れた、粉々の鏡から聞こえてきた。

いくつにも割れた鏡に映るいびつな俺は、確かに俺の顔だった。うのに、全くの別人だった。

十歳の子供とは思えないほど冷めた目をして、冷たく笑う俺が、そこにいた。

『司。原因は確かにお前だ。けれど、壊したのは彼女だ。だから、彼女も罰を受けなくてはならない。』

今夜、彼女が助かって、これから彼女は、ささやかながらも一生不幸になってしまいが……、それでも、彼女を生かしてほしいかい?』

鏡の中の自分が、いたぶるように笑って訪ねたのは、目に焼き付いている。

当時の俺は、鏡の俺が言っている意味をよく理解していなかった。

けど、理解していてもいなくても、答えは一緒。

「いい! それでいい! ……俺が、守るから!」

俺が全部、守るから! 梓を不幸から絶対に守ってやるから!」意味をよく理解していない、考えなしなセリフだった。

でも、今でもこの気持ちは、この願いは変わらない。

守りたい。どんな不幸からも、梓を。梓だけを

『そうかい。……なら、もうひとつ、覚悟なさい』

鏡の俺と、俺の顔が全く逆の感情で歪んだ。

鏡は狂喜の面に。

俺は絶望に……………

「俺にはわからないよ、梓」

女子トイレから梓を引つ張り出して、人気のない体育館裏に連れてきて、俺は言った。

謝り倒すつもりだったけど、今は何も謝れない。

心がずっと、ざわついている。苛立つてる。

梓を傷つけたやつらに、そいつらをかばう梓に、何も分からない俺自身に……そして、梓をこんな目にあわせて、ニヤニヤ笑い続ける「あいつ」に。

「梓。どうして俺に、『見捨てる』なんて言うんだ？俺は、お前のことを見捨てるなんてできない。」

梓は黙って俯いている。

……こんな梓、見たことない。

どうして、どうしていつもみたいなのに、訊かれていないことまでも何でもかんでもマシンガントークで、まくしたててくれない？

俺は……、俺は本当に、君のことを何にもわかっていないのか？

十年、一緒にいるのに。

十年、ずっとずっと君のことが

「だって、……厭なんだもん」

梓のつぶやきが、蚊が鳴くようなか細い声が聞こえた。

「え？」

「……だって、厭なんだもん！　いつか、……いつか司に愛想尽かされて、見捨てられるのは嫌！

それなら、今、見捨てられた方がいい！　いつか失うくらいなら、今、なくなっただ方がいい！！」

駄々をこねる子供のように、梓は叫んだ。

涙をこらえて、唇を噛みしめて、血を吐くような悲痛な声で、い

っそ泣いていてほしいくらい、辛そうに。

「司には、……司には、わかんないよ！ 私が、どれだけ司がいなくなってしまうのを、怖がってるかなんて！

昔は……司が私を頼ってきてくれたけど、今は、私、何にも出来ないもん。司がいなくちゃ、何もできないもん」

何も、できない？

ちゃんと、できてるじゃないか。

今日も、昨日も、今までずっと。

「直美たちの言う通りだよ！ つ、司は、今は、好きでやってるのかもしれないけど、でも、好きな子ができたら、どうするの？

私ばかり見てもらえないじゃん！ 私のせいで、司に彼女ができないうのは厭だよ！ でも、彼女ができて、見捨てられるのはもつとやだ！

……何で、どうしてこんな面倒くさい私の相手、ずっとするの？ わかんないよ！ 私に司の気持はわかんないし、司もわからないよ！

いつか、失うかもしれない、見捨てられるかもしれない関係に、ずっとビクビク怯えてる私の気持ちなんて……！

ああ、そのとおりだよ。

ずっとずっとわからなかった。

そんなことに、おびえていたなんて。こんなにも、君が不安だったなんて。

だって、考えもしなかったから。

ずっとずっと大好きな君を見捨てて、梓以外の女の子を好きになって、梓を見捨てて、俺には考えもつかなかった。

「梓」

平均よりも小柄な梓を、抱きしめた。

四年前は俺の方が小さかったのに。

「俺は、泣き虫だったよな？」



「はあ？」

「お前の後ろに隠れて、お前に守ってもらうのが当然で、甘えることを恥ずかしいと思っていない、クソガキだった俺と、どうしてお前はずっと一緒にいてくれた？」

「え？」

「……それと、同じだ。俺は、お前が俺を見捨てなかったのと同じで、俺も、何があってもお前を見捨てはしない」

「ごめん。梓。卑怯な言い方をして。」

「まだ俺は、勇気を持ってない。好きだって言えない。けど、わかってほしいんだ。これだけは。」

「頼むから、お前の世話を焼かせてくれ」

「この罰あたりものを、そばにいさせてくれ。」

「……彼女、できないよ。私の世話ばっか焼いてたら」

「じゃあ、お前がなれ」

「は？」

「結婚しろ」

「何いつてんの？」

「梓が涙を引つ込めて、全開全力で呆れて言う。」

「うん。俺も、もはや何言ってるのか、自分でもわからん。」

「小学生の時から約束だ。もういつそ、結婚しよう。そうしたら、世話がどうこう、見捨てる云々なんて考えずにすむ」

「私の悩みや葛藤を、そんな冗談で片付けるなー！！ 第一、結婚しようなんて、一度も言っただ覚えないわー！！」

「うおっ！？」

「某格ゲー必殺技級のアッパーを飛ばしてきやがったので、あわてて抱擁を解き、逃げる俺。」

「……いい考えだと思っただけだな」

「どの辺が？ あー、本当になんか、悩んでた私が馬鹿みたいじゃん。司のアホー、ボケー、マキシマムー！」

「意味わかんねえよ」

梓にいつもの調子が戻って、ホツとすると同時に、胸の奥がえぐられるように痛んだ。

…… ああ、やっぱり。

わかっていただけ、やっぱり梓は思い出さなかった。

「大きくなったら、結婚しよう」

いじめられて泣く俺に、君が確かに言ってくれたあの約束を。

わかっていたのに……、身勝手にも俺は、いつか思い出してくれないかと期待している。

守ってくれなくていい。ただ、確かにこの約束をしたことを、……俺たちが「恋人」だった時を、思い出してほしいと。

「…… ねえ、司」

梓が、淡く微笑んで訊いた。

「本当に、司はいいの？」

…… 何を？ なんて、訊くまでもない。

「俺は、梓を守れないことを後悔しても、梓と一緒にいることを、後悔なんてしたことない」

だから、どうかこれからもそばにいさせてくれ。

たとえ、君がほかの誰かを好きになっても……

俺が恋するのは、きっと一生君だけだから。

「…… ありがとう。司」

君は笑って、ほんの少しだけ泣いた。

うれし泣きかもしれないし、まだまだ不安なのかもしれない。何かがどうしようもなく、悲しいのかもしれない。

それでも彼女は、笑って泣く。

俺も泣きそうになったけど、根性でこらえた。

俺が泣いたら、梓は泣けない。泣くのを俺以上に我慢する。

それをわかってるから、俺は四年前、もう泣かないと決めたんだ。

そしてまた、決心する。

絶対に、泣きはしない。



## 6・二度目の初恋

机の中から、鏡を取り出す。

四年前、俺のせいで梓が壊してしまった御神体。

俺が血まみれになって、セロテープをべたべた貼って稚拙に直した鏡を。

「……何のつもりだったんだ？」

「何が不服なんだ、司？　せつかく、愛しい女子を助けられたというのに？」

鏡に映る、俺ではない俺がからかうように言う。

……四年前、俺が泣きながら、謝りながら鏡を直していた時に出会ってから、こいつは時々、鏡や何かに映った「俺」の姿を借り、俺に話しかける。

俺以外にはだれにも聞こえない声で。

こいつが「神」なのかどうかは、俺にはわからない。

こいつ本人も、「神」だと名乗ったことはないし、はっきりいつてこいつは性格が悪すぎる。

神よりも悪魔や悪霊に近い、絶対。

「何で、俺に梓を助けに行かせた？　そんなこと、今まで一度もなかっただろ？」

「言っただろう？　あの不幸は、……友人と思っていた者に、言葉でいたぶられ、嘲られるのは私の管轄外だ。ただでさえ、お前のせいで不幸となった彼女が、これ以上理不尽な不幸は哀れだと思ったからだ」

本当に憐れんでるなら、そのニヤニヤ笑うのはやめろ！

「……そう思うんなら、もう、梓を不幸にするのはやめてくれ。するんなら、俺を不幸にしてくれ」

もう、何度目かわからない懇願。

答えは、いつも同じ。

『それは利けぬ願いだな。』

確かに、原因はお前だが、彼女は無罪というわけではない。……

それに、彼女が不幸でなくなったとしても、彼女の罪をお前が背負っても、失ったものは、お前の罪は消えぬよ、司。』

わかつてる。

わかつてるよ。

もう、戻らない。あの日、失ったものは。

俺の「恋人」は、もう戻ってこない。

四年前のあの日、鏡の俺は楽しくて楽しくて仕方がないという顔で、俺に言った。

『彼女を助ける代償として、彼女はお前への『恋心』を失うことを、覚悟なさい。』

わかるかい、司？ これは、君への『罰』だ。』

目の前が、真っ暗になった。

理解したくないのに、理解してしまった。

それはつまり……「梓」は助かって、俺のことを好きになってくれた、「結婚しよう」と言ってくれた「恋人」は、もう戻ってこないということ。

怖かった。

助かって、俺のことを好きじゃなくなった梓が、俺のことをどう思うかが心配で心配でたまらなかった。

俺のせいで、こんな目に会ったんだ。

嫌われるかもしれない。もう一生、口もきいてもらえないかもしれない。

『どうする？ お前は、自分のことを憎むかもしれない彼女を、不幸から守って生きていくのかい？』

それとも、お前を愛してくれている彼女のまま、看取るかい？』

正直言って、心がぐらついた。

梓に嫌われて生きていくぐらいなら、梓に好かれたまま死んでもらった方がいいかもしれないと、本気で思った。

でも

『ごめんね。……司、……ごめんなさい』

病室で、熱にうなされて、呼吸がえもままならない梓が、泣いて謝って、俺に語った言葉が蘇る。

『司のお嫁さんになれなくて　ごめんなさい』

「梓が生きていてくれたら、もう俺はそれだけでいい!!」  
叫んだ。

泣いて、叫んだ。

嘘っぱちの言葉を。

本当は嫌われたくない。好きでいてほしい。それが無理なら、いつそ失った方がいい。

けれど……、でも……、どんなに好かれていても……、あんな最期は厭だ！

……ごめん。梓、本当に、身勝手な俺でごめん。

死んだ方がましかもと、勝手に思って、俺の自己満足のために、こんな不幸を背負わせて……

大好きな君を、傷つけてばかりな俺でごめん。

そんな俺を、好きになってくれて、ありがとう。

「……まあ、いい。とりあえず、一応礼は言っとく。教えてくれて、ありがとう」

『どういたしまして』

それだけ言っつて、俺は机の中に鏡を片付けようとしたら、鏡はぼそりとこんなことを言い出した。

『そういえば、司が彼女を見捨てないのは、昔の司を彼女が見捨てなかったのと同じと説明したが、彼女はどう取ったんだろうな？』

「……さあな」

あれは、卑怯な説明だ。

俺が梓を見捨てないのは、梓のことが好きだからだと言えなかったから、そういっただけで、「恋心」を失った梓には、なんであんな甘ったれな俺を見捨てず、そばにいてくれたのかはきつと、梓にとつて大きな謎だろう。

そんな風に俺が言うつと、鏡の方は少し笑った。

何かを企んでそんな裏のある笑みはいつも通りだが、人の心を経うて貫いて楽しむような笑いではない。ほんの少しだけ、いつもより好意的に見える笑みが、逆に不気味だ。

「……なんだよ、その笑いは？」

『ふふ……。司、そういえば言った覚えがないが、私はな、神薙梓から、「恋心」という花は、確かに刈り取った。一度刈り取った花は、もう枯れるしかない。戻りはしない。』

……けれども、私は『思い出』という根は、丸ごと残しておいてあるんだがな』

？ どういう意味だ？

『司、彼女は恋心を失ったが、お前と過ごした日々は、何一つとして、失っていないんだよ。』

『結婚しよう』だの『愛してる』などの睦言を言ったことは、忘れていかも知れんが、そう言いたくなっただきかけである出来事はすべて、何一つ欠けることなく覚えていてる』

……覚えていてる？

俺たちが、「恋人」だったことは覚えてなくとも、「結婚しよう」という約束は、なかったことにされても、俺たちがそうなるきっかけは、あいつは、梓は覚えているのか？

『刈られた花は、もう元には戻らない。だが、根が残っていれば、時間をかけ、丹念に世話を焼けば、またもや咲くかもしれんな。』

前とは形が違えど、同じ花が……』

急激に、顔が熱くなる。

思い出すことはなくても、それでも梓はまた俺を……

俺に、いつか見捨てられるなら、今見捨ててほしいと言ったのは……、彼女ができて見捨てられるのは厭だと叫んだのはもしかしたら……、嫉妬？

って、先走りすぎだ、俺！

『司、顔が赤いぞ』

「うるさい！！」

鏡だっというのに、俺とは違って涼しい顔で言うそれを、机の中にしまいこんで、俺は床に膝を抱える。

あー、やばい。

昼間とは全然違う意味で、頭にのぼった血が沸騰する。

心臓が口から飛び出しそうなくらい、ドキドキする。

どうしよう。うれしくてたまらない。

この、二度目の初恋が、もしかしたらかなうかもしれない思ったら。



## 6・二度目の初恋（後書き）

昔、漫画で描いた話を、小説に直してみました。

一日クオリティの駄文を読んでくださって、ありがとうございます。  
もしよろしければ、感想もお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3826j/>

---

罰あたり者の恋人

2010年10月8日14時30分発行